

大学院生プロジェクト型研究・研究成果報告書

研究代表者：小岩 広平（臨床心理学コース）

■ 研究題目
「空気を読むこと」に失敗した人物への認知と行動パターンの関連 —いじめへの介入方法の探索を目指して—
■ 研究代表者・分担者 氏名
小岩 広平（臨床心理学コース）（代表者）
■ 研究成果概要（目的、実施内容、結果、今後の課題など）
【問題と目的】 現代における「空気」は、青年期の友人関係において強い影響力を及ぼしている（土井, 2008）。青年たちは周囲からの排除を恐れて協調的になっており（高橋・山岸・橋本, 2009）、若い世代ほど「空気」に過敏であることを示す社会調査が行われている。 現代青年の友人関係における「空気」の影響力の高まりに伴い、「空気」を読むことの失敗に起因しいじめの発生が、教育現場で問題となるようになった（堀, 2015；土井, 2008；2014）。いじめの発生理論として内藤（2009）は、現代青年が校則や社会のルールより友人集団内の「空気」を重視しており、そこから逸脱した人物をいじめのターゲットとする構造にあるとしている。現代の学校現場において、「空気」を読むことに失敗した人物がいじめのターゲットになる事例が多数報告され（堀, 2015；土井, 2008；2014）、内藤（2009）の理論が支持されている。 空気に関する心理学的な研究において、「空気」は「その場にいる人々に望まれているかどうかを基準とした、その場面でのふるまいの規範」と定義される（小岩・小松・若島, 2020）。空気を心理学的に検討した小岩他（2020）は、空気を読むことに失敗した人物に対する青年の行動を、「いじり・からかい」「放置」「叱責」「フォロー」「陰口」「仲間外れ」の6つに分類した（小岩・小松・若島, 2020）。しかしながら、現代青年がこれらの行動を選択する際に、どのような認知をもっているかについては、検討が行われていない。したがって、空気を読むことに失敗した人物に対して、どのような認知をもっている青年が攻撃行動を選択し、どのような認知をもっている青年が「フォロー」を行うのか、その決定因となる認知を検討することにより、いじめの発生予防に結びつく知見を得られる可能性がある。

本研究では、行動に影響を与えうる現代青年の空気を読むことに失敗した人物への認知として、①逸脱者の意図の予測、②逸脱者のパーソナリティ評価、③現代青年が行動を行う際の行動目標の三つをとりあげ、これらが行動に与える影響を検討することを目的とした。

【予備調査1】

本研究で提示する場面について検討するため、大学生82名(平均年齢20.80, SD=1.19, 男性39名, 女性43名)を対象に、予備調査を行った。予備調査では、小岩他(2020)が作成した、「Aさんが空気を読めなかった場面」を4つ提示した。そのうえで、4つの場面において、Aさんの言動が「不適切」と判断される度合いやAさんに対して抱く怒り感情の度合いを測定した。怒り感情については、上原ら(2012)が作成した怒り感情を測定するための形容詞項目を用いた。そのうえで、①怒り感情に性差がみられないこと、②逸脱者への怒り感情の得点が高いことの二つの基準により、場面1「Aさんが話を聞かない場面」を本研究では用いることとした。

【予備調査2】

本研究の三つ目の目的である現代青年の空気を読めない言動に対する行動目標を検討するため、予備調査2を行った。大学生106名(平均年齢21.08, SD=1.41, 男性51名, 女性55名)を対象に質問紙調査を行った。予備調査1より、空気を読めない場面として「Aさんが話を聞かない場面」を用いた。

使用する目標の項目について、先行研究(小岩・小松, 2020 ; 大淵・福島, 1997; 磯部ら, 2007)をもとに、「雰囲気維持目標」「擁護目標」「排除目標」「制裁目標」の4つの目標を想定し、36項目を選定した。予備調査により、フロア効果・天井効果の検討、信頼性係数およびit相関などの観点からの検討が行われ、行動目標の項目として、20項目が選定された。

【本調査】

・調査対象

日本の大学生201名(平均年齢20.81, SD=1.60, 男性47名, 女性154名)。クラウドソーシング会社クラウドワークスにより、回答を募集した。

・質問紙の構成

空気を読むことに失敗した場面の提示 「友人たちと一緒にいるときに、もしこのような場面があったら、あなたはどのような行動をとるでしょうか。想像して教えてください。」と教示した。また、調査では、空気を読めない言動が起きた場面として、小岩他

(2020)の「話を聞かない場面」をもとに場面を設定した。調査では、「空きコマの時間に、あなたは友人たちと話していました。そのときに友人の一人が、『実は最近、悩んでいることがあって・・・』と重い口調で、最近の悩みを打ち明けてくれました。友人たちがみな、真剣な表情でその悩みについて解決策を考えている中で、Aさんだけが『この前、自分もさあ』と、自慢話を明るいテンションで話し始めました。」と場面を提示した。Aさんについて 調査ではAさんの人物像について、「Aさんはあなたと同じ性別です。Aさんは、あなたが行動をともにしている友人グループの一人で、知り合って半年ほどの人物です。あなたはAさんと、友人たちとみんなでいるときには話すけれども、二人きりでは話すことはほとんどないような関係性です。」と提示した。

空気を読むことに失敗した人物の意図の推測 小嶋・福島・大淵(2017)をもとに、9項目を設定した。逸脱者の意図の予測としては、敵意・利己的動機・好意的意図の三つが想定された。

空気を読むことに失敗した人物のパーソナリティ予測 空気を読めない言動と関連するパーソナリティとして、社会的自己制御をとりあげた。社会的自己制御のうち、感情・欲求抑制に関する項目である9項目を用いた。

空気を読めない人物に対する行動目標 予備調査2によって作成された20項目を用いた。

空気を読むことに失敗した人物への行動 小岩他(2021)の設定した項目を使用した。これらの項目は、「いじり・からかい」「放置」「叱責」「フォロー」「陰口」「仲間外れ」の6つの下位因子が想定されている。調査では、これらの項目について、6件法を用いて回答を求めた。

不良回答者の検出 クラウドソーシングによる調査では回答の質が低下する可能性が懸念されたため、本研究では増田・坂上・森井(2019)のInstructional Manipulation Check 課題を用い、不良回答者を検出し、不良回答者を分析から除外した。

【結果】

1. 逸脱者への行動目標の分類

空気を読むことに失敗した人物に対する行動目標を分類するため、最尤法・プロマックス回転による因子分析を行った(Table1)。その結果、4因子が抽出された。

2. 空気を読めない人物への認知が行動に与える影響

それぞれの行動得点を目的変数、行為者の認知を説明変数として、階層的重回帰分析を行った。なお、階層的重回帰分析において、Step1では行動意図の予測を(友好性・敵意・自己優先)、Step2ではパーソナリティの推測(社会的自己制御)を、Step3では行動目標(擁護目標・排除目標・制裁目標・雰囲気維持目標)を、それぞれ変数として投入し、ステップワイズ法によって β 値を算出した(Table2)。

Table1. 空気を読めない言動が発生した際の行動目標の分類

	F1	F2	F3	F4
雰囲気維持目標 (α=.84)				
(18) Aさんの言動によって乱れた雰囲気をもとに戻したい	.88	.01	.07	-.04
(10) この場面が険悪にならないようにしたい	.79	.03	-.15	.06
(14) この場の雰囲気をよくしたい	.76	.15	-.17	.14
(2) どうにかしてこの状況をかえられるように努力したい	.56	-.06	.26	.04
排除目標 (α=.82)				
(17) Aさんとは関わりたくない	-.03	.86	-.06	.01
(1) Aさんとは距離を置きたい	.12	.71	.03	.00
(13) Aさんとの関係を解消したい	.04	.62	.19	.03
(9) Aさんには、友人グループにいてほしくない	.10	.56	.14	-.18
(3) Aさんとい関係を維持したい	.17	-.46	.13	.26
制裁目標 (α=.79)				
(4) Aさんの行為を罰したい	.04	-.13	.80	-.15
(12) Aさんを打ち負かしたい	-.03	.08	.78	.05
(8) Aさんのことを苦しめてやりたい	-.24	.19	.76	.24
(16) Aさんに反省をさせたい	.31	.03	.50	-.17
擁護目標 (α=.84)				
(11) ほかの友人たちに、Aさんを嫌いになってほしくない	-.05	-.01	-.01	.85
(19) Aさんを友人グループから孤立させたくない	.08	-.05	.03	.73
(15) Aさんを傷つけない	.05	.08	-.11	.72
(7) Aさんとうまくやりたい	.17	-.23	.10	.48
	因子間相関	-.04	-.17	.46
			.40	-.53
				-.16

【考察】

空気を読めない言動に対する行動を選択する際の目標

本研究では、空気を読むことに失敗した人物に対する行動に影響を与える認知を明らかにすることを目的としていた。その結果、「いじり・からかい」「放置」「叱責」「フォロー」「陰口」「仲間外れ」を行う青年たちの行動目標が明らかになった。「いじり・からかい」は、擁護目標と制裁目標の二つの目標によって生起するコミュニケーション行動であることが示された。攻撃的ユーモアには、攻撃と受容の二つの側面があるとされているが (Martin, 2007), 本研究はこの指摘と一致していた。ユーモアは多義的な性質をもつため、制裁と擁護の相反する目標によって、「いじり・からかい」が選択される

Table2. 空気を読むことに失敗した人物への認知が行動に与える影響

	好意	敵意	利己的 動機	感情 欲求 抑制	擁護 目標	排除 目標	制裁 目標	雰囲気 維持 目標	R ²
いじり・からかい									
ステップ 1									
ステップ 2									
ステップ 3					.28**		.29**		.13**
放置									
ステップ 1									
ステップ 2				-.21**					.04**
ステップ 3				-.11		.32**			.14**
叱責									
ステップ 1		.43**							.18**
ステップ 2									
ステップ 3		.04					.64**		.45**
フォロー									
ステップ 1	.19**								.03*
ステップ 2									
ステップ 3	.02				.48**		.15*	-.19**	.20**
陰口									
ステップ 1		.31**							.10**
ステップ 2		.30**		-.16*					.12**
ステップ 3		.01		-.05	-.14*	.20*	.36**		.31**
仲間外れ									
ステップ 1		.28**	.17*						.12**
ステップ 2				-.18*					.15**
ステップ 3		.11	.04	-.05	-.23**	.47**			.46**

ことが考えられる。

次に「放置」は、排除目標が活性化された場合に選択されることが示された。空気を読めない人物に対する「放置」には、その人物を擁護する目的があることを小岩ら(2021)は考察しているが、本研究では擁護目標ではなく、「排除目標によって「放置」が選択されていることから、小岩ら(2021)は否定されたといえる。すなわち、現代青年が空気を読めない人物に対して放置を選択する場合には、婉曲にその人物への拒絶的な考えを示すことが多いことが考えられる。

さらに、「叱責」は、「制裁目標」とのみ、関連していることが示された。叱責が選択される目標は、その人物に対して攻撃的意図をもち、その人物を制裁しようとして行われる行動であることが示された。

さらに、「フォロー」は、擁護目標・制裁目標・雰囲気維持目標の三つの目標と関連していた。このうち、もっともβ値が高いのは擁護目標であった。そのため、空気を読めない言動をした人物に対しての「フォロー」は、その人物を擁護することを目的として

選択されることが明らかになった。他方で、雰囲気維持目標が、フォローに負の影響を与えていることも示された。大石(2009)は、現代青年が空気を読めない人物を「フォロー」するのは、全体的な雰囲気の維持のためであると指摘しているが、大石(2009)の指摘は否定された。すなわち、空気を読めない人物へのフォローは、雰囲気を壊すリスクのある行動であることが予想される。

他方で、「陰口」は、擁護目標・制裁目標・排除目標の三つの目標によって生起するコミュニケーション行動であることが示された。 β 値を比較すると、「陰口」は排除目標との関連が深いことが示された。したがって、空気を読めない言動をした人物に対して「陰口」を行う際には、その人物のことを集団から排除する目的で行われることが多いといえる。

最後に、「仲間外れ」は、排除目標・擁護目標により生起することが明らかになった。「仲間外れ」は、制裁目標が関連しないことが特徴的な結果として示された。制裁目標には、その人物に対する攻撃としての側面がある一方で、その人物の変化を期待する行動目標でもある。そのため、「制裁目標」が活性化されなくなった場合に、排除目標となり、「仲間外れ」が生起すると考えられる。

行動意図およびパーソナリティの推測との関連

次に行動意図およびパーソナリティの推測と、空気を読めない言動への行動の関連について考察する。逸脱者の行動意図の推測のうち、「敵意」は、叱責・陰口・仲間外れの三つの行動と関連していた。敵意によって、制裁目標が活性化され、その結果叱責と陰口が行われるようになることが示された。敵意帰属バイアスの研究においては、相手の行動が敵意にもとづいたものであることを推測する場合、攻撃に結び付くことが示されているが(磯部ら, 2007)、本研究はこの知見と一致していた。空気を読めない人物に対する叱責や陰口の背後には、敵意的な帰属が関連していることが考えられる。つぎに、好意は、フォローとのみ、関連していた。空気を読めない言動をした際に、その言動に好意を感じた場合には、擁護目標が活性化され、フォローが行われることが示唆されている。さらに、自己優先は、仲間外れとのみ関連していた。自己優先的な動機の推測は、その人物が自身の感情のコントロールをできない人物だという認知が形成され、その結果仲間外れが行われることが明らかになったといえる。

さらに、社会的自己制御の予測と行動の関連について考察する。間接的攻撃として想定されている「放置」「陰口」「仲間外れ」の三つの行動は、感情・欲求抑制傾向とそれぞれ間接的に関連していることが明らかになった。空気を読めない人物を直接的に制裁するかどうかの決定因として、「社会的自己制御」得点があることが明らかになったといえる。この点について先行研究では、①理解しあえる可能性、②報復される可能性の二つの観点があるから考察が行われているが(Melho et al., 2020)、本研究の結果もこ

の観点からの考察が可能である。すなわち、社会的自己制御ができない人物としてみなされることにより、理解し合えない人物と認識され、話し合っても報復されてしまう可能性を恐れるために、直接的な言及が困難になる。その結果、社会的自己制御が低い場合には、排除目標が活性化され、間接的攻撃が生起するといえる。

いじめ研究への示唆と今後の課題

本研究の結果は、空気を読めない人物に対する行動と認知の関連を示したものである。その結果、「フォロー」に結びつく認知として、「好意」があることが明らかになった。そのため、空気を読めない人物に対して「フォロー」する行動を行うためには、その人物がいかに集団に対して好意的であるかを示すことが必要である可能性がある。一方で、空気を読めない言動により、その人物が「感情のコントロールができない人物」としてみなされている場合には、放置・陰口・仲間外れのリスクが高まることに留意することが必要であるといえる。

一方で、調査対象が限定的なものであるため、本研究をいじめ研究に直接的に結びつけるには、限界がある。本研究が基盤とした研究の多くが、大学生に対して調査したものであったため（小岩他，2020；大石，2009；2011），本研究では青年期後期の友人関係である大学生を対象とした調査を行った。しかしながら、発達段階をふまえると空気を読めない言動に対するいじめや攻撃行動が問題として起こりやすいのは中高生であると考えられる。したがって、今後は中学生・高校生にも同様の調査をし、類似の結果が得られることを確認することが必要である。

<引用文献>

- 朝日新聞（2013）．「場の空気」気づかう20代 朝日新聞 Digital Retrieved from <https://www.asahi.com/articles/ASF0TKY201312270214.html>（2020年9月30日）
- 土井 隆義（2008）．友だち地獄——「空気を読む」世代のサバイバル—— 筑摩書房
- 土井 隆義（2014）．メディアの変容——若者のケータイ・スマホ文化とキャラ的コミュニケーション—— 井上 俊（編）現代文化を学ぶ人のために 全訂新版（pp.98-111） 世界思想社
- 磯部 美良・菱沼 悠紀（2007）．大学生における攻撃性と対人情報処理の関連——印象形成の観点から—— パーソナリティ研究, 15, 290-300.
- 小岩 広平・小松 眞峰（2020）．現代青年がもつ「空気」への態度に関する質的研究 東北大学大学院教育学研究科臨床心理相談室紀要, 18, 163-178.
- 小岩 広平・小松 眞峰・若島 孔文（2020）．現代青年の友人集団における「空気」を読めない言動への対処行動 心理学研究, Advance online publication. <https://doi.org/10.4992/jjpsy.91.19032>

- 小岩 広平・小松 眞峰・若島 孔文（未刊行）．現代青年の「空気」を読むことに失敗した人物への行動パターンと異質な他者への態度との関連
- 小嶋かおり・福島治・大淵憲一（2017）．対人葛藤において推測された対立者の心的状態が解決方略に及ぼす影響 応用心理学研究 43(2), 123-133.
- 増田 真也・坂上 貴之・森井 真広（2019）．調査回答の質の向上のための方法の比較 心理学研究, 90（5）, 463-472.
- Molho, C., Tybur, J., Lange, V. & Balliet, D. (2020) . Direct and indirect punishment of norm violations in daily life. *Nature Communications*, 11, 1-9.
- 内藤 朝雄（2009）．いじめの構造—なぜ人が怪物になるのか— 講談社
- 大石 千歳（2009）．「空気が読めない」とはどういうことか？—社会的スキルの欠如という観点からの検討— 東京女子体育大学・東京女子体育短期大学紀要, 44, 87-96.
- 大石 千歳（2011）．運動部場面と友人関係場面の「空気の読めなさ」の比較研究—社会的スキルおよび個人・社会志向性との関連をふまえて— 東京女子体育大学・東京女子体育短期大学紀要, 46, 75-85.
- 大淵 憲一・福島 治（1997）．葛藤解決における多目標—その規定因と方略選択に対する効果— 心理学研究, 68(3), 155-162.
- 高橋 知里・山岸 俊男・橋本 博文（2009）．集団からの排除と相互協調的自己呈示 社会心理学研究, 25（2）, 113-120.